

ヴィクトリア時代の労働者と自伝

佐久間 亮

【要約】 十九世紀中葉以降のイギリス労働史を読み解く鍵として、「労働貴族」あるいは「リスベクタブルな労働者」の存在が注目されてきた。しかし、近年この層が担ったとされる価値規範のレヴェルから、こうした像の再検討の必要性が主張されてきている。それによると、同時代の外的観察者たるミドル・クラスによる、「リスベクタブル」な者と「ラフ」な者への選別的二分法が、この像の形成に多大な影響を及ぼしてきたとされる。とするならば、リスベクタビリティという価値規範を担ったとされる労働者自身の自己認識は如何なるものだったのだろうか。本稿では、彼ら自身の手になる自伝を分析し、そこに描かれる自己像を明らかにすることからこの問題へのアプローチを試みた。その結果、ミドル・クラスが理念化した「リスベクタブル」な側面のみならず、それとは一見矛盾を孕む「伝統文化」へのアイデンティティという二重の自己像が浮かび上がってきた。このことは、逆にミドル・クラスによる労働者二分法の恣意性、ひいてはリスベクタビリティの一面的強調の問題性を明らかにするものである。

史林 七一巻四号 一九八八年七月

はじめに

十九世紀中葉以降、イギリスはヴィクトリアニズムという言葉に象徴される安定の時代を迎えたとされる。この変化の要因及び、その担い手を巡ってイギリスにおいても、我が国においても様々な角度から論議が重ねられ、その中で「労働貴族」という階層がクローズ・アップされてきた^①。近年その枠組の一つの到達点を示すG・クロシツクやR・グレイらの研究は、この階層の担った価値観・文化の領域に分析の視点が置かれている点に著しい特色がある。ここでは、この階層

が従来ミドル・クラスと共有するに至ったとされる生活規範としてのリスベクタビリティの質が、彼らのコミュニティ生活のレヴェルから再検討され、その結果彼らの価値観の一定の自律性が主張された。^③

他方、労働者の階層規定概念としての「労働貴族」の有効性を否定する見解も近年優れた成果を産み出してきている。

G・S・ジョーンズやA・リードらもまたこの価値の領域に触れ、リスベクタビリティという規範の労働者による担い手が、強固な熟練工組合に属する成人男子労働者という、この概念が想定する層を遙かに越えた裾野を持つものであったと主張する。^④

この概念に否定的であれ、その一定の有効性を主張するにせよ、共通の認識になりつつあるのは、この価値規範が主張される階層及びコンテキストによって、微妙にそのニュアンス・意味付けに相違が見られるという点である。^⑤ この点をさらに進めて、リードはミドル・クラスを中心とする六十年代の第二次選挙法改正推進派による半ば理想視された労働者像「リスベクタブルな労働者」が、同時代の労働者観及び、後の「労働貴族」概念の形成に著しく影響したとする。更に、P・ベイリは「リスベクタブル」―「ラフ」という労働者の区分自体、ミドル・クラスによる恣意的選別の産物であるとして、この二分法に疑問を呈している。^⑦

そもそも、この価値規範は、伝統的生活態度を引きずる労働者の人格「矯正」を目的とする、十九世紀前半のミドル・クラス主導による改良的運動の支柱をなすものであった。^⑧ そこにおいて、労働者の示す伝統的・共同体的慣習への固執は、個人の「怠惰」に置き換えられ、またこのコミュニティに根ざした「民衆文化」の示す集団性・群衆性、更に時として顕現する攻撃性への恐怖と敵意がこれらの運動の原動力となった。^⑨ 「リスベクタブル」な者と伝統的生活へと沈没する「ラフ」な者への労働者の選別と前者の理想化、これがこうした運動の多くに見られる特徴であった。

リードやベイリの言うように、「リスベクタブルな労働者」という像が外的観察者の先入観、理念の影響を強く受けてきたとするならば、この規範が同時代の、そしてそれを受け入れたとされる労働者の眼にはどのように映り、また彼らは

それに対していかなる意味付けを与えていたのか。これが現在の研究の焦点の一つをなすと思われる。そして、この脈絡で労働者自身の手になる自伝の存在が興味深い研究対象として浮かび上がってこよう。労働者の体制内化が進行したとされる世紀中葉に「リスペクタブルな労働者」の典型と見られた人々の自伝に示される自己像「自己認識の在り方はいかなるものであったのか。換言すれば、労働者自身の自伝という限られたコンテキストにおける、労働者にとってのリスペクタビリティの意味と重みを考察するのが本稿の目的である。^⑩

- ① 十九世紀前半の労働者の階級としての形成から、中葉以降のその体制内化という断絶説と、こうした段階的・構造的変化を認めず労働者の置かれた環境の改善を通じての「暴動」の減少と「良識」ある近代的労使交渉への漸進的移行を主張する連続説とが対峙する。そして産業革命を通じての「悲観学説」と「楽観学説」がこの背景にある。これらについては松村高夫「十九世紀第三・四半期のイギリス労働史理解をめぐって」(上)『日本労働協会雑誌』第三二四号、一九七七年、参照。「労働貴族」はこの断絶説のキー概念であるが、この立場の研究ではこの概念の有効性について否定的なものがある。例えば、P. Joyce, *Work, Society and Politics*, 1980, 及び N. Kirk, *The Growth of Working Class Reformism in Mid-Victorian England*, 1985, 等。
- ② リスペクタビリティの意味とこの時代におけるその中心的地位についてはいくつかの文献を参照。G. Best, *Mid-Victorian England*, 1971, esp. pp. 256-283.
- ③ R. Q. Gray, *The Labour Aristocracy in Victorian Edinburgh*, 1976, G. Crossick, *An Artisan Elite in Victorian Society*, 1978.
- ④ G. S. Jones, "Working-class Culture and Working-class Politics in London, 1870-1900: Note on the Remaking of a Working class Culture", *Journal of Social History*, VII, 1974, pp. 460-508.
- ⑤ A. Reid, "Intelligent Artisans and Aristocrats of Labour: the Essays of Thomas Wright", in J. Winter, ed., *The Working Class in Modern British History: Essays in Honour of Henry Pelling*, 1983, pp. 171-186.
- ⑥ R. Q. Gray, *The Aristocracy of Labour in Nineteenth-century Britain c. 1850-1914*, 1981, pp. 37-38 (以下「*Aristocracy of Labour*, 略記」)
- ⑦ Reid, op. cit., pp. 173-174.
- ⑧ P. Baily, "Will the Real Bill Banks Please Stand Up? Towards a Role Analysis of Mid-Victorian Working Class Respectability", *Journal of Social History*, XII, 1979, esp. p. 341.
- ⑨ こうした改良的運動の一例として「合理的娯楽」運動のリーダー、川島昭夫「十九世紀イギリス都市と『合理的娯楽』」中村隆二郎編『都市の社会史』(『ネットウマ書房』一九八三年)所収、参照。
- ⑩ 例えば R. Malcolmson, *Popular Recreation in English Society 1700-1850*, 1973, p. 103, 及び R. Storch, "Persistence and Change in Nineteenth-century Popular Culture", in R. Storch, ed., op. cit., p. 119, 参照。

- (1) Samuel Bamford, *Early Days*, 1848, edited with an introduction by W. H. Chaloner, 1967.
- (2) James Burn, *The Autobiography of a Beggar Boy*, 1855, edited with an introduction by D. Vincent, 1978.
- (3) Thomas Cooper, *The Life of Thomas Cooper*, written by himself, 1872, edited with an introduction by J. Saville, 1971.
- (4) Benjamin Brierly, *Home Memories and Recollections of a Life*, 1886.
- (5) *Life and Struggles of William Lowell in His Pursuit of Bread, Knowledge and Freedom*, 1876, reprinted with a preface by R. H. Tawney, 1920.
- (6) Rovert Lowery, *Passage in the Life of a Temperance Lecturer, Connected with the Public Movements of the Working Classes in the Last Twenty Years, by One of Their Order, Weekly Record of the Temperance Movement 15 April 1856-30 May 1857*, reprinted in, Rovert Lowery, *Radical and Charist*, edited with an introduction by B. Harrison and P. Hollis, 1979.
- (7) Charles Smith, *The Working Men's Way in the World: being the Autobiography of a Journeyman Printer*, 1853, reprinted with a preface and notes by E. Howe, 1967.
- (8) Christopher Thomson, *The Autobiography of an Artisan*, 1847.
- (9) Alexander Somerville, *The Autobiography of a Working Man*, by "One who has Whistled at the Plough", 1848, edited with an introduction by J. Carswell, 1951.
- (10) William Dodd, *A Narrative of the Experience and Sufferings of William Dodd, A Factory Cripple written by Himself*, 1841, reprinted with new pagination, 1968.
- (11) Charles Shaw, *When I Was a Child by an Old Potter*, 1903, reprinted with an introduction by R. Hagger, 1977.

このなかで、本稿では「ロビン・ケル・マン・シーラー」の自伝を中心として検討を加える。これは後述で触れるように、この時代の「ロビン・マン」読者に「ロビン・マン」な労働者像を提示したもので、最も広く受け入れられたもののひとつである。他の自伝も、いずれもほぼ同時期（シミュウを除く）に執筆された「オートリニズム」の影響を強く受けているのである。シミュウの自伝は、定期的に示されるが、他の自伝著者達とはほぼ同時代人であり、共通の「オートリニズム」を示しているのではなく、労働者の自伝と言った場合の「労働者」とは、両親を労働者として生を受けた、執筆時点と自己を労働者として呈示しているものの意であって他意はない。

1 自伝叙述の趨勢と研究状況

十八世紀後半から今世紀にかけて、連綿と続く夥しい数の自伝を収録したW・マチュウズのリストを見ると、自伝叙述が極めてイギリス的伝統であるとの印象を受ける。しかしながらそこに収録されているのは、主に政治家、外交官、法律

家等、各界著名人のものが中心であり、労働者による自伝はごく限られた数にすぎない。このリストに象徴されるように、従来、労働者による自伝は比較的等閑視されてきたとの印象はぬぐい難い。^①

それでも、労働史の社会史への接近を背景に、労働者の日常生活、家族・近隣関係を例証する史料として自伝はつとに利用されてきた。しかし、その利用の仕方これまで一般的に見られた傾向は、労働者の生活の一断面を例証するために、該当箇所を自伝全体の文脈から切り離して引用するというもので、一つの自伝全体の内容に即したものではない。^② また、稀に十九世紀中葉の自伝それ自体に言及される場合でも、スマイルズの『自助』に代表される「成功物語」の労働者による一潮流と見られるくらいであった。^③

このように自伝の自伝としての研究は等閑視されてきたが、これは労働者の自伝に次の二つの史料としての制約があると思われるためである。一つは信憑性の問題。もう一つは一般性の問題である。信憑性についての疑念は、著者の価値観の反映が客観的事実の叙述を妨げているという点と、更に著者による意識的な虚偽の叙述がなされた可能性に向けられている。一般性の問題とは、自伝を書き記す知的能力・余暇に恵まれていたのは労働者の極僅かな層に過ぎず、他の無言の大衆の声は自伝には反映されないとするものである。^④ 特にこの点に関して重要なのは十九世紀を通じて女性労働者の自伝数が著しく少ないという点である。^⑤

こうした制約が有りながらも、近年漸く労働者の自伝をそれ自体として正面から扱った研究が現れ始めた。J・バネットによる自伝編纂に始まり、八十年代に入って、D・ヴィンセントやN・ハケットによる自伝研究が著された。^⑥ またこれらと並行して、続々と自伝の復刻が進み、八十四年にはヴィンセント、バネットらによる自伝のビブリオグラフィが出版されるに至った。^⑦

こうした自伝研究の進展と共に、労働者による自伝の存在状況が次第に明らかになってきた。上記の諸研究は何れも十九世紀以降に書かれ、或いは出版された自伝を対象とするものである。しかしこれらが、自らの人生体験の記憶を文字に

表① 著者生年及び出版年分布
(非出版の場合、執筆年)

著者生年	人数	出版年	自伝数	非出版
1720—29	3	1790—99	3	0
30—39	4	1800—09	6	0
40—49	3	10—19	11	1
50—59	9	20—29	12	1
60—69	4	30—39	8	0
70—79	25	40—49	28	1
80—89	23	50—59	44	1
90—99	28	60—69	22	2
1800—09	41	70—79	32	3
10—19	50	80—89	38	1
20—29	73	90—99	33	3
30—39	53	1900—09	78	5
40—49	32	10—19	36	7
50—59	60	20—29	54	4
60—69	58	30—39	84	7
70—79	70	40—49	53	9
80—89	96	50—59	33	27
90—95	77	60—69	37	11
不明	33	70—79	26	22
計	742	80—	12	0
		不明	10	39
		計	660	144

J. Burnrnett, D. Vincent and D. Mayall, op. cit. から作成。これには1790年から1900年の何れかに生涯がかかる著者742名による自伝(804点)が収録されている。

記すという慣行の先駆であったわけでは必ずしもない。イギリス民衆は十七世紀のピューリタン達
が記した「靈的自伝」Spiritual
Autobiography以来の伝統を持つ。
良心と行為の厳格な自己省察に
よる魂の救済の希求、その過程に
おける自己分析が他の信者達にと
っての里程標たるべく文字という

形に結晶し、民衆個々の手による「天路歷程」として残されたのである。^⑧
この伝統は十八世紀のメソヂストとそれ以降
の福音主義非国教徒の手によって十九世紀へと受け継がれていく。^⑨

とはいえ十九世紀の自伝は、質的にはその世俗化という点でこれまでの伝統との断絶を示す。しかし、何よりも著しい変化は表①から明らかのように、十九世紀に至っての量的増大である。特に出版年から見ると、四十年代以降の増加が著しく、これは識字率の全般的上昇^⑩と、労働者コミュニティへのコミュニケーション媒体の拡充^⑪、及びその積極的創造という過程^⑫と軌を一にしている。

しかしこれらは自伝叙述の必要条件にすぎない。ウィンセントは、より積極的な要因として主に以下の三点を指摘している。^⑬一つは労働運動の歴史の舞台への登場である。運動の大義・経験、そして事実関係を後の世代に語り継ぐ必要と義務とを運動の指導者達は感じたのである。ことに世紀前半の労働運動がコミュニケーション闘争の観を呈したが故にことは時間の経過による忘却への危惧という以上の切迫性を帯びる。^⑭また、上記の必要と義務とは、自伝執筆の動機のみなら

ず、その正当化の要因でもあった。^⑮

このような労働者の危惧は単に政治運動という局面に限定されない。工業化と都市化という波に晒されて、従来の農村的コミュニティの解体が進行する。それと並行して、ローカルな世界にのみ代々伝えられてきた、口承伝承や慣習の類が、それらの伝達の一手段であったチャップ・ブックの衰退と共に忘却の危機に陥る。これへの危惧が自伝執筆の大きな要因であったことは否めない。都市化がもたらしたコミュニティの解体を、同じく都市化が提供した活字文化の形で理念的に維持しようとしたのである。^⑰

三点目の動機も、この急激に進行する工業化、都市化が背景にある。すなわちこの過程の帰結としての「イングランドの現状」への認識の在り方がそれである。無知と悲惨さと共に都市の裏側に放置された貧民大衆の存在、これは同時代のリスペクタブルな人々にとつての驚きと嘆き、或いは脅威の対象であった。「現状」の度重なる調査はこの驚愕の結果であり、またそれを増幅させた。しかし自伝の多くに散見されるのはこうした調査に対する異議申し立てなのである。この抗議の背景には自伝著者達に共通する以下の認識が読み取れる。すなわち、特定の個人や集団のアイデンティティはその属する特定の文化というコンテキストから理解されるべきであり、またその文化を理解し得るのはそれに属する者のみであるとするのがまず一つ。また、その前提として、社会下層の最も蔑まれた人々の間にもそれ自身の歴史とモラルが存在するという主張がある。上から見下した如き調査とそれに付随する善意の押し付けがましさへの抗議、これが自伝叙述の三点目の動機をなした。^⑱

このように、労働者の自伝叙述は極めて十九世紀的現象なのである。十九世紀以降に隆盛を見た労働者による自伝、しかしこれらがジャンルとして確立したと言われるのは、世紀中葉に書かれたトマス・クーパー、サミュエル・バンフォードらの自伝においてなのである。そして、実はジェームズ・バーンの自伝を含めて、これらこそ「リスペクタブルな労働者」像を呈示したものと同時代人から、また後の歴史家からも受けとめられている自伝なのである。^⑲以下、クーパー、バ

ーン、バンフォードの自伝全体を通じて描かれる自己像を明らかにする。その際、そこに描かれた自己像もしくはそれに至る自己形成の過程と客観的事実との整合性を問題にはしない。R・パスカルの言うように、自伝とは執筆時点という単一のペースペクティブから「過去を造形する作業」^⑧なのである。したがって自伝の史料としての性質は、例えば日記のそれとは著しく異なる。この点は先述のように、史料としての自伝の孕む弱点ではあるが、寧ろここでは自己認識における主観性の方を重視したい。本稿の目的は、「リスベクタブルな労働者」の側からの自己認識の在り方を明らかにすることなのだから。

① W. Matthews, *British Autobiographies*, 1956.

② 例えば、次の研究を参考し、自伝の利用法を参照。S. Meacham, *A Life Apart: The English Working Class 1890-1914*, 1977.

③ J. F. C. Harrison, "The Victorian Gospel of Success", *Victorian Studies*, I, 1957, p. 157. ここにハリソンが挙げるのが、D・バンフォード、T・ターナー、更にA・サマヴィルの自伝である。本稿では、このうちバンフォード、ターナーの自伝の再検討を行う。

④ 優れた自伝研究を著したD・ヴァンセント、更にJ・ハネットの⑤制約の影響に深く触れよう。D. Vincent, *Bread, Knowledge and Freedom: A Study of Nineteenth-Century Working Class Autobiography*, 1981, pp. 3-11, J. Burnett ed., *Useful Toil: Autobiographies of Working People from 1820's to 1920's* 1974, pp. 11-13.

⑤ ヴァンセントはこの原因として、一般的には、自伝を叙述する者の自己意識の欠如、より具体的には、労働者諸組織（後に触れるように、これが自伝叙述のための訓練と刺激を提供した。）から女性が排除されてきたこと、家庭における女性の従属的地位の二点を挙げよう。Vincent, op. cit., pp. 8-9.

⑥ J. Burnett, op. cit., D. Vincent, op. cit., N. Hackett, *Nineteenth-century British Working-class Autobiographies*, 1986. この「ハネットとハケットのもの」は、自伝の抜粋の編集および、その注釈である。D・ヴァンセントのものが初めてのもので、唯一の本格的な労働者の自伝研究である。ヴァンセントは十九世紀に書かれた百四十二点もの自伝を対象としている。しかし、そのアプローチの仕方（自己の設定したテーマ（労働者の家族生活と知的改善の過程）の記述史料として自伝を利用するといふこと）であり、そこでは筆者の自己認識の在り方を示すものとしての個々の自伝の全体像は問題にならない。この点について後述する本稿のアプローチとは著しく異なる。

⑦ J. Burnett, D. Vincent and D. Mayall eds., *The Autobiography of the Working Class: An Annotated Critical Bibliography* Vol. I, 1790-1900, 1984.

⑧ これについては、P. Delany, *British Autobiography in the Seventeenth-century*, 1969, pp. 6-104, J. Morris, *Versions of the Self, 1966*, chs. II and III. 参照。また、「歴史的自伝」を手掛かりに、十七世紀の一般民衆への識字能力の浸透を検討したのが、M. Spufford,

"First Steps in Literacy: the Reading and Writing Experiences of the Humblest Seventeenth Century Spiritual Autobiographers", *Social History*, vol. 4, no. 3, Oct 1979, pp. 407-435. 449-50.

⑧ I. Rivers, "Strangers and Pilgrims: Sources and Patterns of Methodist Narrative", in J. C. Hillson, M. M. Jones and J. R. Watson eds., *Augustan Worlds*, 1978, pp. 189-203.

⑨ 初期の上流化が一般的識字率に及ぼした影響については「禁欲派」「禁欲派」の二陣営に研究者は別れる。ここでは前者にM・サンダースン、R・S・スコフィールド、後者にL・ストーン、R・M・ハートマンの名を挙げておけば充分であろう。この論争で、一七六〇から一八二〇年にかけては、識字率の趨勢によって地域ごとに著しい差異が存在することが明らかになった。しかし、三十年代以降の全般的上昇傾向については、数値データ及びその要因の解釈共に異論はない。以下M・Sanderson, *Education, Economic Change and Society in England, 1780-1870*, 1984, 参照。

⑩ この頃編み出されたR. K. Webb, *The British Working Class Reader 1790-1848*, 1955, esp. pp. 158-159. 東にR. Altick, *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public 1800-1900*, 1957, 参照。

⑪ 一七九〇年のロンドン通信協会の活動以来、労働者階級は「扇動的不信心な」宣伝活動の伝統を持つ。二十年代以降の「無印紙新聞闘争」War of the Unstamped についてはJ. Wiener, *The War of the Unstamped*, 1969, P. Hollis, *The Paper Press*, 1970, E. Royle, *Victorian Infidels*, 1974, 参照。また、自伝著者達の多く（本稿で検討するラヴェット、ターバー、スミス、サマワイルを含む）が、この時代のジャーナリズム活動の経歴を持つ。

⑫ 以下D. Vincent, op. cit., pp. 19-29, 参照。

⑬ 例えばロンドン通信協会の指導者「トマス・ハーディーの自伝」や同時のロンドンケーンメン手段の不備及び偏向についての不満が記されている。D. Vincent, *Testaments of Radicalism: Memoirs of Working Class Politicians 1790-1885*, 1977, p. 37. (以下「Testaments」略記)

⑭ 例えばW・ラヴェットは「序文に自伝執筆の動機の一つとして、以下のように記している。「これまでどこも労働者階級の公的活動についての公正かつ正確な説明は歴史上におぼつた。また我々の時代の公文書においても見出し出せない。たとえ今日のトリー系、ウィッグ系の新聞がその行動に注意を払ったところでも、それはむしろ事実を歪曲し、その過ちや失敗を誇張し、労働者の意図や目的を嘲笑する為のことだ。事実の記録よりも、ハートロンを喜ばせるほうが重要なのだ。この不正故に未来の歴史家や著作家達は、その案内役として歪曲された話しか入手し得ないであろう。」Lovett, op. cit., p. xxxiii. こうした動機は、他にLowery, op. cit., p. 39, 等。

⑮ これについてはウェブのWebb, op. cit., p. 30ff.

⑯ 例えばC・シモスは次のように記している。「この世代の人々は、スファンタスの時代同様に私の若かった時代に切り離れられてしまった。イングランドの四十年代については、マラオの時代のロジント程度にしかもはや分からなくなってしまうのである。Shaw, op. cit., p. 205. その他にこれを執筆の動機として明記してあるものには、ロビンソン・ウトルソンの自伝等がある。Vincent, *Testaments*, p. 200.

⑰ ターバー、ドッドらもこの調査に参加している。しかしそれについて自伝には詳しく触れられてはならない。

⑱ こうした例については Vincent, op. cit., pp. 23-24.

二 自伝とリスペクタビリティ

以下に検討を加える三つの自伝は何れも十九世紀中葉に出版され、商業的成功が最も著しく、ヴィクトリアニズムの中心的価値規範であるリスペクタビリティを労働者の側から提示したとの評価を受けたものである。^①しかし同時代の読者に如何に読まれたかについてはひとまず措き、ここでは、著者達の自己認識の在り方とその自伝への反映を内在的に読み取ることを課題とする。先述のように、自伝がその執筆時点のペースペクティブからの自己像「造形」の作業とするならば、ここで検討する自伝も、著者自身が自己形成上重要と捉えた要素を軸に再構成することが可能である。

(1) 『トマス・クーパーの生涯』一八七二年

この自伝はこの頃出版された労働者の自伝中もっとも広く読まれ、バンフォードのそれと共にこのジャンルの「古典」とされている。この自伝が三つの要素を軸に成り立っているのは明瞭である。一つは幼少時からの執拗な知識の追求への意欲とこれを通じての人格形成の過程。二点目は青年期からのチャーティストとしての政治活動。そして最後にウエズリ派メンディズムの影響を受けて以来の宗教的懷疑・苦悩である。チャーティストとしての政治活動への参加とその挫折は、夫々この自伝の分岐点をなす。また、最後のテーマは前二者ほどには顕示されぬが常にこの自伝を伏流し、信仰と、知識の追求を通じての「合理的」生活態度の獲得といういずれも彼にとっての「生涯を通じてのテーマ」^②は常に緊張を孕みつつテキスト全体を貫いている。そしてこの緊張が一見したところ平板な自己陶治物語あるいは「成功物語」^③と思われがちなこの自伝に微妙な陰影・屈折を与えている。

まず、この自伝の大まかな内容について簡単に触れておく。クーパーは一八〇五年レスターに生まれる。しかし、最初

の記憶は父親との死別以降、母親の手で養育されたゲインズバラ時代である。^④ここでの幼・少年期の叙述を経て、リンカン、ロンドンで過ごした青年時代までが第一部をなす。四十年十月からのレスターの生活において転機が訪れる。すなわち、政治の時代の幕開けである。チャーティストとしての講演活動が一因となったハンリの炭坑夫暴動を契機に彼は扇動と陰謀の廉で二年間（四三年春～四五年春）のスタフォード監獄での獄中生活を余儀なくされる。ここまでが第二部をなす。チャーティズムを含めて、釈放後の政治活動についての言及はこれまでとは対照的に外在的なものに終始する。^⑤政治的穏健化以降、ロンドンを中心とする文筆業、ジャーナリストとしての経歴と講演活動に叙述の力点が置かれる。しかし、この叙述も幾分唐突な宗教的懷疑とその克服についての告白と共に異なる様相を呈することになる。以降四部では彼の生活はイングランドのみならずアイルランド、スコットランドをも含む布教・講演活動に捧げられる。

三十五章からなるクーパーの自伝は内容的に四部に分けられる。以下では、先述した主要テーマ間の絡まり合いが彫琢する陰影を第一部から順次追いつつこの自伝を再構成する。第一部は彼の人間形成期にあたる。ここでもっとも力説されるのは執拗なまでの知識への渴望である。早くも三才時から読み書きを独学で始め、年長の少年に文字を教えるまでになったとしている。^⑥また六才から教区学校に通い、そこで奨学金を得たことを誇示している。^⑦しかしあくまで自己の知的到達における独学・自助の比重の高さがここでは強調される。^⑧病弱な幼少時故に母親が買い与えたベニー・ブックに始まり、十才時に入手した『天路歷程』以降、彼が列挙する書物の数の膨大さがそのことを遺憾なく示す。^⑨この叙述の背景には幼少時からの自己の知性への自負がある。それは十五才時に彼が靴屋の徒弟を志した折の母親の落胆ぶりについての記述に示される。自分の知性は「低い身分の労働者」になるには不釣り合いだったと言うわけである。^⑩徒弟修業のために学校を離れて後もクーパーの知識への渴望は些かも衰えない。そのことは就業中の学習や労働者仲間との相互扶助の叙述に示される通りである。これらの叙述に滲み出る独習者としての誇りはこの第一部を特徴づけるものである。

しかし、既に一部において、他の二テーマが配置され、後の展開が予示される。まず、徒弟修業に入る直前の時期、近

隣のブラシ作り職人達から「急進主義の精神」なるものを注入されたとする^⑨。この政治的覚醒の事情はここではこれ以上の展開を見ずに終わる。ここでそれ以上の比重を占めるのが宗教的苦悩についての記述である。それはほぼ同時期原始メソヂイスト派の協会に入会したときに始まる。そのときの原罪の呵責は「書物に何ら喜びを見い出せなくなった」程であり、ここに第一のテーマとの齟齬が示される。その後、この呵責に対する嫌悪を覚え、読書へと立ち戻っていくことになるけれども^⑩。第一部を特徴づけるのが確信に満ちた知識の追求というテーマとするならば、この二テーマ間の緊張そのものが、その陰としてここでのもう一つのテーマを形づくっているとの観すらある。

この二律背反は随所に示される。彼にとって、書物による知識の追求は「合理的」生活態度の達成を目的とするものであった。しかし、書物の探究を通じて自分が「あまりに合理的 too rational」となることを憂えてもいる。その危惧とは、具体的には旧約聖書に懐疑的になっていく自己へのおそれであった^⑪。この緊張は彼の内面に留まらず、周囲コミュニティとの関係においても現れる。彼の示す懐疑主義的傾向は他の信者達の疑惑の対象となり、また彼が宗教と無関係な書物に没頭することが非難の的ともなった。クーパーにとって、知識の追求は「精神の靈的狀態を損なう kill the spirituality of mind」^⑫とつながり、この二つの領域は「巧く間を取り持つことが容易でない」^⑬対象なのであった。ともあれ、第一部においては知識の追求が主要テーマであった。この成果が学校経営の成功とジャーナリストとしての経歴の開始につながる。しかし、知識追求の結果が経済的安定とは無関係であったこともここで示される^⑭。

このジャーナリストとしての経歴の開始が彼を人生の第二局面へと向かわせることになる。記者として、レスターの靴下編み工達の窮状を眼の当りにして、彼は知識追求以上に有意義な活動の場を見いだす事になった。ここにもう一つのテーマ間の緊張が示唆される。しかしこれはさほど深刻なものではない。レスターの代表的チャーティストとして、彼の活動の中心を占めたのは労働者集会での講演活動であった。そしてこの労働者啓蒙活動こそ、一部での知識追求の成果を示す場だったのである。したがって、チャーティストとしての活動から獄中生活に至る叙述の主眼は、政治活動のさなかに

あつてもリスベクタブルな人間として、理性的行動を堅持した自己を示すことにあつたようである。¹⁵

他方、ここでは第一部でみられた緊張は影を薄める。この間を通じて、信仰に関しては僅かに終盤の数ページで語られるに過ぎない。しかも、その内容はレスターで貧民達の困窮に直面しての、キリストの贖罪に対する懷疑と無神論への接近であり、こうした傾向は獄中生活で更に強められたとされる。¹⁶ 政治的挫折という面での断絶はあるが、この自伝にはその挫折感が深刻なものとして記されてはいない。むしろ第二部から第三部への連続性がここでは際立つ。

第三部で展開されるのは知識追求による自己陶冶の成果の顯示である。釈放後、オコナー、ラヴェットらとの乖離によつて、チャーティズムと一線を画して以降、講演・ジャーナリズム活動や、自己の文芸作品の出版者を求めての奔走といった事柄に記述は終始する。こうした活動を通じて強調されるのは、各界著名人に「知的な」、「ジェントルマン」として受け入れられていく自己の姿なのである。こうした記述には枚挙に遑がない。¹⁷ これらの叙述とともに、再び一部でみられた如き独習の様が描写される。しかし、こうして到達した「リスベクタブルな地位」が、経済的安定とは無縁であつたこともここで併記される。¹⁸

三部の叙述の些か楽観的なトーンは四部に入つて一変する。転機は一部から予示されてきたとおり、宗教的確信によつて訪れる。二テーマ間の緊張は非合理的衝動に促されての布教活動への没入という形でピリオドが打たれる。¹⁹ 放浪者の如き布教活動の末に病に倒れる様の叙述は殉教者の趣がある。²⁰

クーパーの自伝は、知識の追求とそれを通しての人格陶冶の過程が叙述の中心である。その意味でこの自伝が同時代人から「リスベクタブルな労働者」像を提示したものととして受け入れられたのも頷ける。しかも、これ程まで徹底して自己陶冶の過程を論じ尽くした例は他にない。この点で、クーパーの自伝は寧ろ例外的である。しかし、こうした自己陶冶に当初からつきまといつて来た矛盾とその帰結、更に到達した「地位」とは裏腹な経済的不安定さなどから見る限り、リスベクタビリティが含意するヴィクトリアニズム的オプティミズムとは些か異なるニュアンスをこの自伝は持つ。²¹ まして、こ

れを社会的上昇の例示としての「成功物語」などとは見做し得ないのである。

(2) 『乞食少年の自伝』一八五五年

クーパーの自伝同様、バーンの自伝は確立期にあったこのジャンルとしては稀な売行きを記録したようである。表題の通り、「乞食」の出自から、本人曰く「ジュントルマン」へと上昇を遂げた人物の記録は、当時流行した「成功物語」の労働者側からのドキュメントとしてミドル・クラス読者の好みに適合したのかも知れない。

この自伝全十三章は、著者自身によって三部に分けられている。以下これに従って、この自伝の概略を示す。第一部は「乞食」としての放浪生活が叙述の中心となる。彼は一八〇二年頃庶出として生を受ける。記憶はスコットランドのダンフリースでの生活に始まる。生後間もなくの実父の放擲と、継父の浪費・飲酒癖等の事情故、家族は「乞食」や行商人として、イングランド・スコットランド境界付近の放浪を余儀なくされる。一時期実父の許に預けられるが、そこでの生活に耐え切れず出奔し、再び放浪生活へと立ち戻る。その際就いた「職業」は変転このうえ無く、召し使いから果ては掏摸や密輸業までがそこに含まれる。

打ち続く貧困と放浪の生活もヘクサムで製帽職人に徒弟入りしてピリオドが打たれる。二十才時の事である。漸く生活の安定を得、徒弟修業を終えた後グラスゴウに定住、当地でチャイニズムを含め政治運動に没頭することになる。しかし製帽業の不振と酒場経営の二度にわたる失敗によって、再び放浪生活を余儀なくされる。ここまでは第二部である。

三部では貧困の極みのままに転職を繰り返す様が描きだされる。しかし自伝の執筆を開始する直前、彼は安定した職を得ることになる。

バーンの自伝をクーパーのそれと比較したとき際立つのはその内面描写の豊かさである。これはバーンの自伝の一つの特徴というより自伝その物が内的自己と外的環境との葛藤を軸に構成されていると言ったほうが良い。外的環境に翻弄さ

れ続けた幼・少年期に失われたアイデンティティの確立、これがこの自伝を通底するテーマなのである。以下、このテーマを軸に見ていくことにする。

まず、第一部では主としてアイデンティティ喪失の事情が語られる。これをもたらした外的環境とは言うまでもなく彼の置かれた家庭環境である。継父との放浪の苦難とその虐待とがアイデンティティ喪失の最初の原因であった。二度にわたる母親の放擲と実父の仕うちによってこの状況は更に深刻化される。実父の許を出奔する際の改名はこの状況を象徴する。以降のバーンの放浪は孤独と無力感に苛まれる。それは、「誰も自分を気遣いはしない」という嘆きや「統御し難い環境の犠牲者」、「舵なしで航海に乗り出した船」といった自己表現に見られる通りである。環境という本流に我を失い漂流する、これが第一部で示されるバーンの自己像である。

幼・少年期に失われた自己の確立、これが第二部の叙述の中心テーマである。「環境の奴隷」状態を脱却しアイデンティティを回復する手立ては既に一部の各所で示されてきた通り徒弟修業による熟練技能の獲得であった。徒弟修業の開始こそが彼の人生の「大転換点」を成した。それは「舵を握った真の航海」の始点と表現される。更に、環境という波に流されぬよう社会に着実に、より強固に錨を下ろす手段として徒弟修業以上に力説されるのが「有用な知識」の追求である。読書による知的改善こそが環境に抗して自己を「自立」させ「理性」によって生活を律していく手立てとして位置付けられる。これこそが彼の言うリスベクタビリティであり、ここにバーンのアイデンティティの一方向が読み取れる。

徒弟修業を終え、グラスゴウに移住し、バーンは自分の仕事場を持つに至る。しかし、フェルト帽作りの機械による代替を契機とするこの職種の不振故、遂にこの職種を放棄せざるを得なくなる。更に不本意な酒場経営にも失敗し、貧困の極みでグラスゴウを後にし、再び放浪の生活に立ち戻ることとなる。この苦況の原因として上記の職種全体の不振が指摘されている。しかし、ここでもまた、環境に抗して自己を制御する能力の欠如という論理が原因として強調される。ここでは、その能力はミドル・クラスの持つ「打算」「抜け目のなさ」「ビジネスの慣習」等として示される。こうした能力

は、バーンの求めたりスペクタビリティとの接点を持たなかったようである。このように経済的安定につながる能力の獲得という点ではバーンの努力は「完全な失敗」に帰したとされるのである。

ところで、この論理は第二部のもう一つの柱であるチャータイストとしての経歴の説明に際しても用いられる。ここではグラスゴウでの政治参加自体、「理性」が環境に押し流された例として示される。その際のバーンの自己表現は「放埒な熱情に取り憑かれた政治狂」等々極めて否定的ニュアンスを伴う。^⑤

ともあれ、「理性」によって自己を律する能力の欠如は、政治への没入という事態のみならず、バーンに再び放浪の生活を強いることになる。第三部で展開されるのは第一部で示された以上の一層徹底した漂泊の様である。「時化の荒れ狂う波間の只中に浮かぶ木片の如く、自身を統御する力も無くあちらこちらへ打ちつけられる」という表現がこの間の状況を端的に物語る。^⑥

しかしこうした叙述のさなか、唐突に彼は「リスペクタブルな地位」に就いたとされる。確かに彼の出自とのコントラストは一見「成功物語」の印象を与える。また、三部で時折見られる「勤勉」、「節約」等スマイルズ風の徳目の奨揚にもそうした面が見られなくもない。^⑦しかしこれらの点のみを捉えて、そのような結論を下すのは早計に過ぎよう。ここまでの叙述からも明らかのように、バーンは寧ろこれを不安定さの中の一時的安定に過ぎぬと見做している様なのである。実際、彼の未来は「暗澹たる航海」とされ、自伝の末尾で五十年の人生を悲観的に振り返ってもいる。そこには「成功物語」が含意するような楽観性は些かも見られない。

ところでバーンの自伝は、先述のように失われたアイデンティティの確立というテーマを軸として整序されたものである。彼が自己の人生を悲観的に振り返る時、その理由を経済的安定につながる能力の欠如に求めているのは明らかである。そうした能力を体现するミドル・クラスに対して、バーンは一方で羨望の眼を向ける。しかしこれがこの自伝を通じてバーンが求めたアイデンティティのありかだったのだろうか。そして、これを求めようとして挫折した者として、否定的自

己像を提示しているのだろうか。

この点で、彼の姿勢は極めてアンビヴァレントである。バーンの叙述は時として、ミドル・クラスに体现される人間像への幾分否定的で、皮肉混じりの構えも取るのである。^④ また、冒頭で触れた通り、他の箇所では自己が到達した特性を「ジェントルマン」のそれとして自負している。

このように見てくると、必ずしも経済的成功につながらない自己陶冶の在り方、換言すればミドル・クラスとは異なる、労働者としてのリスペクタビリティの在り方にこそこの自伝を通じてのバーンの自己像の所在を求めることが出来るのではなからうか。とはいえこのアイデンティティの在りかにバーン自身必ずしも確信を持っているとも言えそうにない。それが、自己の人生を評価する際の曖昧さにつながっている。

ところで、先に触れたミドル・クラスに対するバーンのアンビヴァレントな態度はこの自伝の示すもう一つの自己認識の在り方につながる。バーンが一方で示したミドル・クラスへの羨望の眼は、彼が社会の変化を担う階層としてミドル・クラスを肯定的に措定している事と関係する。この評価は、変化とそれがもたらした恩恵への肯定的叙述へと連なる。特にコミュニケーションの機会拡充がその恩恵として力説される。^⑤

しかし、他方でこの変化で消滅しつつあるもの、その担い手であるミドル・クラスの価値観で切り捨てられつつあるものへの愛着もまた示される。これは乞食や、行商人らのもつ独自の慣習・文化、更にこの文化と緊密に結びついた迷信的伝承等を叙述する際に見られる。^⑥ そして、随所に見られるこうした叙述を背景にそのような文化的土壌に育まれ、またその中で生活する人々の気持ちを実に理解しうる存在として自己を提示している。^⑦ 更にミドル・クラスの伝統的文化への見下した如き蔑視に対し、それを「人間間」というものの持つ性質への寛容なる感受性の欠如」として抗議してもいる。^⑧

この自伝には抗い難く進行する工業化、都市化の様子が背景として入念に叙述されている。^⑨ この変化がもたらした所与の環境、それがバーンにとっての克服すべき対象であった。彼は「有用な知識」の追求を通じて伝統的文化とは異質の価

値観を身につけようとした。それが環境への処方であり、彼にとつてのリスベクタビリティであった。しかし、それをミドル・クラスの価値観と対峙させたとき示されるアンビヴァレントな態度、これは彼のもう一つのアイデンティティの在り方に起因する。

(3) 『若かりし日々』 一八四八年

バーンの自伝同様、バンフォードの自伝においても自己と環境という二本の柱が存在する。しかし、バーンの自伝においては両者間の激しい緊張関係を軸に叙述が展開されたのに比して、ここでの環境とは故郷ミドルトン周辺の農村コミュニティであり、それは克服すべき対象としてではなく、寧ろ人格を育んだ土壌として肯定的に、また愛着の念に満ちた叙述で描かれる。

この自伝は青年期以降の専ら急進派としての経歴を記したもう一つの自伝、『一急進派の人生』^④の後に出版された。したがってここでは幼少期から青年期までが叙述の中心を占める。しかし前者が一九世紀前半の代表的急進派としての政治的・公的活動の叙述に終始し些か平板なのに対して、ここでは私的領域の叙述が中心を占め、これを通じて彼の自己認識の在り方が滲み出て興味深い。前作においてバンフォードが政治的人間として余りにも一面的に描かれたが故に、この自伝の執筆の主要な目的は自己の人間としての全体性を示すことにあった。それは、日常生活の瑣末な出来事に至る記述という形を取るが、バンフォードはそれから「ささやかな人生が成り立っているのだ」として叙述の正当性を主張する^⑤。そうした断片的身近事情の叙述に合して自己形成上重要な二要素が配される。一つがクーパー、バーンの自伝にも見られた書物を通じての知的陶冶の過程。もう一つは後の経歴を暗示する「急進派としての資質」覚醒の事情である。以下、この二つのテーマを軸にバンフォードの自伝を検討する。

バンフォードは一七八八年マンチェスター近郊のミドルトンに生まれる。冒頭の二章ではまず祖先の系譜が一七世紀に

まで廻られる。そこにおいて興味深いのは、ジャコバイトであった一人を含め、祖先から「反抗の血」を継いだ「生まれながらの急進派」との自己表現である。しかし、ここでの自伝らしき叙述はこれのみである。以下は、祖先から自己の時代にかけてのミドルトン周辺の様子、過去と現在のノスタルジィに満ちた対比、更に住民と「ジェントルマン」とのパターナリスティックな関係の在り方への憧憬等が記される。ここには地域の迷信的伝承の見聞も織り込まれ、当時のミドルトンの雰囲気醸し出される。

以上の舞台設定の後に自伝らしい叙述が展開する。既述の「反抗の血」は諸々の局面で覚醒する。裕福な伯母の母親への仕打ちは少年時代の感性に「裕福さ故の傲慢さに対する憎しみ」と「正義と憐憫の心」とを植え付け、ペインに傾倒した父親の影響、あるいは六歳以降の救貧院での生活体験が「裕福な連中の偏見」への憤りと「利益のみに没頭する輩への侮蔑の念」を刻み込んだ云々。そうした記述の締め括りとして自伝の末尾にミドルトンを含む広範囲で勃発したラッダイト運動への共感と当局の対応への憤りが記される。

他方、知識の追求についての記述はクーバーのそれに匹敵する。少年時代に手にした『天路歷程』を初めとして、書物に向けられる熱意は自伝全体を貫く。更にマンチェスターのグラマー・スクールの体験についての詳細な叙述はその後遺症と共に、自己形成には及ぼした影響の甚大さを伝える。

確かにこの二テーマはバンフォードの自伝を貫く縦糸である。しかしこれらと併行して日常雑事の叙述が淡々と述べられる。そしてこの二テーマはそうした叙述中に埋没しているとの観がある。また二テーマ間の関連も判然としない。執筆時のペースペクティブからの一貫性にバンやクーパーの自伝の特徴がみられたとするならば、バンフォードの場合それを何処に求められるのだろうか。

ここではむしろ執筆時への求心性の弱さにこそバンフォードの自伝の特徴があるとみたい。すなわち自己形成の契機についての叙述の背景への埋没は、逆説的にバンフォードのアイデンティティの在りかを示している。この背景とは失われ

つつある農村コミュニティとその慣習である。ノスタルジイに満ちたその叙述は背景から時に前面へと押し出る。冒頭の二章に始まり、自伝中盤では、織布工と炭坑夫達の昔ながらの慣行、懺悔節 *Shrove-tide*、四旬節第四日曜 *Midlent-Sunday* の行事、イースターの仮装訪問と「偽市長」*Lord Mayor* 選出の儀式、イースター水曜のホワイト・エプロン・フェア、五月一日の「災厄の夜」*Mischief Night*、^① 聖霊降臨節 *Whitsuntide* の教会献堂記念祭 *Rush-bearing* もろゝは *Wakes*、十一月五日のガイ・フォークス・デイの慣行等が延々と記される。失われつつあるこうした世界の叙述にこそ、バンフォードの自伝の最大の力点があったと見て良からう。むしろこれらを自伝という形式で示したところにバンフォードのアイデンティの在りかが明示されている。

このアイデンティの在り方はこうした世界の孕む精神風土への共感を含む叙述として表現される。そしてバーンの自伝の持つ二面性はバンフォードの自伝にも見られる。書物を通しての「合理的」知識の追求者としてのバンフォードの眼はこの精神風土に含まれる迷信や因習という不合理性に対し、叙述のある時点では冷やややかである。序盤の二章で展開される迷信等の叙述を説明して、それらが重要性を帯びるのは「当時の農村の人々の精神や生活様式に及ぼした影響に鑑みて」の事であり、それらの「存在自体を想定するのは他愛の無いこと」として片付ける。^② ここでバンフォードの姿勢は冷静な外的観察者としてのそれである。しかし、こうした非合理性を内に含んだ労働者の伝統的文化についての価値判断に至って、この二面性が如実に現れる。この文化・慣習の衰退を眼の当たりにしてバンフォードはこの事態が「文明という言葉で表現されるかの精神状態及び身体的慣習に向かつての前進なのか、それとも退歩なのか」として、その判断を読者に委ねざるを得なくなっているのである。そして、この自伝全体を通じての著者のアイデンティの向きはバーンに増して伝統的文化寄りである。

① 出版部数及び売行きは断片的にしか判明しないが、ターバーの自伝は一八七二年に出版された後二年で七千部売れ、四版を重ね、その後

も広く読まれた。バーンの自伝も出版部数は不明だが、一八五五年から五九年の間に四版を重ね、八二年には改訂新版も出されている。バ

- ンフォードの自伝は改訂版を含めて少なくとも三版を数えている。以上 Burnett, Vincent and Mayall eds. op. cit., p. 41。
- ① Cooper, op. cit., pp. 36, 43.
- ② 先述のように、J. F. C. ハリソンはこの自伝をスマイルズ流の「成功物語」の一変種としている。
- ③ 労働者の自伝においては、自己のアイデンティティを最初に示す目的で遙か過去まで家系を遡るのが慣例であるが、この自伝はそうした慣行に否定的である。Cooper, op. cit., pp. 3-4.
- ④ この章での政治活動についての例外的叙述は、彼とマッチーニとの関わりについてである。Ibid., pp. 299-301.
- ⑤ Ibid., 5-7.
- ⑥ この奨学金はブルーコート・スカラーという、ゲインズバラの某ジエントリによる慈善奨学金である。Ibid., pp. 12-13.
- ⑦ クーパーにとっての幼少時からの願いは大学教育を受けることであったが、それも父の死による家庭の窮迫と共に断たれ、以後の情熱は独学に注がれたとする。Ibid., pp. 25-27.
- ⑧ Ibid., *passim*.
- ⑨ 「彼女（母親）はこの申し出に落胆したようだった。彼女は幼少時から私の性向を具に見てきたのだ。そして、私の知性のあらゆる芽を育もうとしてきた。そして、息子との未来が突進をした低い身分の労働者であろうとは夢にも思わなかっただろう。」Ibid., p. 41.
- ⑩ 「最も誇り高き戦士がかつて成し遂げた以上の偉大な征服を、教師の助けを借りることなく成し遂げたのだ」と記している。
- ⑪ 職人達はコベット、ウーラー、ハントの信奉者であり、彼らの話を聞くうちにリバプール内閣への憎しみと、貧民の困窮への怒りを覚えるようになったと記す。Ibid., pp. 35-36.
- ⑫ Ibid., pp. 37-38.
- ⑬ Ibid., pp. 49-50.
- ⑭ Ibid., p. 39.
- ⑮ それぞれ Ibid., pp. 83, 70.
- ⑯ 彼は学校経営の成功（生徒数百名を教えた。）を誇らしげに記している。Ibid., p. 73. しかし、この成功とジャーナリズム活動とが経済的安定につながらなかったことは、一部の結末であるロンドンでの生活が、貧困の窮みとして描かれていることから明らかである。Ibid., p. 127ff.
- ⑰ レスターンシャ・マッキーリの記者としてチャーティスト集会に赴いたことが、彼の運命を変えた出来事とされる。その時の様子を次のように記す。「外見上はいかに不名誉であれ、無数の人々の社会的・政治的権利を勝ち取ることと比べれば、そのようなこと（知識の追求）は、物の数ではなかった。」以上は、Ibid., pp. 134-147.
- ⑱ Ibid., p. 164ff. また、これはスタフォード監獄についての叙述にも見られる。彼のリスベクタビリティは、監獄付教戒師の目に、彼がチャーティストであることが信じ難く映った程であった。pp. 237-257.
- ⑲ 「それは不正に満ちた世の中と私には映った。そして、その様な世の中には全能の神も、またその恵み深き配剤も存在するはずが無かった。」等々。Ibid., pp. 259-262.
- ⑳ ことに「ファergus・オコナーとの不和が決定的であったとされる。Ibid., pp. 271-274, 303. また、「暴力と失敗にまみれた」後期チャーティストムに参加しなかったことを幸運な事とし、そこには挫折感などは見られない。Ibid., p. 311.
- ㉑ Ibid., 264, 340. 等。
- ㉒ 様な友人からの生活援助や、職を求めている奔走の様が三部後半に描かれる。Ibid., p. 369. 等。

②4 クーパーは列車事故を危うく免れたことを神の奇跡とし、これが宗教的確信と布教活動への転機となったとしている。また、この義務の為に、自己の知的向上の活動を断念したとしている。Ibid., pp. 375-381.

②5 五十八年六月から六十六年十一月の八年半の間に「スコットランド」アイルランドを含めて三千三百七十三回の布教講演を行い、遂には病に倒れる様子が記される。Ibid., pp. 387-389.

②6 実際、自伝の末尾で、ウィクトリアニズムの繁栄の波に呑み込まれ、かつての急進性を失いつつあるランカンシャの労働者への危惧が表明される。Ibid., p. 393.

②7 自伝末尾に、次のように記される。「私がかつて乞食としてを迷って歩いた土地を、今度はジェントルマンの特性を備えて in the character of a gentleman 歩いた。そして私がかつて施しを求めた家々へ、一度ならず私の地位には過ぎた敬意をもって挨拶を受けた。」Ibid., p. 201.

②8 この自伝は長男トマス宛の書簡の形式を取っているため、Chapterの代わりに、Letter が当てられている。

②9 生年、及びその場所が定かでない、というのが、最初のアイデンティティの危機の表明であり、後の展開を示すものである。Ibid., p. 41.

③0 継父ウィリアム・マクナミーには飲酒・浪費癖があり、また定職を持たなかった。また、放浪のさなか、マクナミーの窃盗が原因で、ハーンはしばしば牢につなされる。Ibid., p. 43f. また、この時期の放浪は、主にタイン川北辺を中心とした。

③1 父親の姓は McBurney であったが、このとき以降 Burn を名乗るようになったとする。また、このときの様子を「肉親や家庭からの逃亡者として、私は広大な世界へとときまよひ出た」と記している。Ibid., p. 78.

③2 それとだけ Ibid., pp. 73, 85, 109. 更にこうした表現は、pp. 108, 121, 等。

③3 「手に職を持つことによって、私は社会の誠実なメンバーと見做されるようになった。」Ibid., p. 105.

③4 Ibid., p. 123.

③5 Ibid., p. 130f. この過程が「リスベクタブルな職人の仲間」に入る前提とされる。

③6 この時期の自己表現は「さまざまのニダ」である。Ibid., p. 149.

③7 Ibid., pp. 144, 156.

③8 Ibid., pp. 145, 150, 175.

③9 Ibid., pp. 138-139, 157. 等々。バーンのチャーティズム(三十九年以降)視は、「数名の気の偏れたリーダーの指示」に無知な大衆が巻き込まれたとする、極めて否定的なものである。同様の見解として cf. Somerville, op. cit., pp. 29-30. 参照。

④0 Burn, op. cit., p. 166f.

④1 これは自伝執筆開始の一年前(五十三年)である。

④2 Ibid., p. 189.

④3 Ibid., p. 199.

④4 こうした人間をバーンは「賢明ならざる」「退屈なタイプの人間」として扱っている。Ibid., pp. 196-197.

④5 Ibid., pp. 58, 103, 183-184, 等。ここで言うロミニケーションとは、具体的には低廉な書物の出版と、鉄道等の交通手段の改善をさす。

④6 この自伝が最も精彩を放つのは、乞食(pp. 45, 52-53, 64)、行商人(pp. 64-65)、更に密輸業(pp. 88-91)、追いはぎ(p. 89)等の世界の掟や風習、また、イングランド・スコットランド境界付近に伝わる迷信的伝承(p. 66)の叙述においてなのである。

④7 以下の叙述を参照。「私自身の階級に属する人々同様、私は貧困の

もとに生まれ、悲しみの中で育てられ、苦難と欠乏の只中で成長した。

所謂、その日暮らしを未だに続ける何千もの人々の気持ちも苦しみを真に理解し得るのは、文明社会に存在する様々な周縁的階層の中で生活を送ってきた者のみなのだ。「社会生活の快適な高見から見下ろす人々は必ず次のように想像するだろう。好意的な人々の慈善に縋って暮らす放浪の『遊牧民』の間には、何ら階層秩序も存在しないであろう。」しかし、「イングリランドの殆どすべての階層は、それ自身のモラルを有しているものであり、個々の人間集団には独自の完全さの基準があるのだ。」^{⑤1} Ibid., pp. 40, 45, 52.

⑤② Ibid., p. 197. 更に、「快適な環境にいる人々が、人間の罪や弱さについての訓戒を垂れることは、この世で最も愚かしい事だ。」とも記している。Ibid., p. 137.

⑤③ 特記 Ibid., pp. 166-171. 参照。

⑤④ *Passage in the Life of a Radical*, 1848, edited with an introduction by W. H. Chaloner, 1967.

三 リスペクタビリティと伝統文化

ここまで三名の自伝を全体として検討を加えた。これらは何れもヴィクトリア中期に「リスペクタブルな労働者」の在り方を示したものとして、読者層に広く受け入れられ、また労働者による自伝のジャンルとしての確立を促したものである。これらの自伝において、リスペクタビリティが共通して、書物の知識を通じての知的・人格的陶冶を経て達成されるものとして示されていたのは見てきた通りである。ここに、自伝著者達の自己認識の在り方が示されていると見て良からう。また、このリスペクタビリティはしばしば「合理性」という言葉と同義として使われていた。

しかし、こうした「合理性」とは異質の、そして時に矛盾する様にも見える労働者の伝統文化へのアイデンティティも

⑤① Bamford, op. cit., p. 174.

⑤② Ibid., pp. 11-22.

⑤③ Ibid., pp. 23-38.

⑤④ それぞれ Ibid., pp. 5-7, 42-50, 50-73, 300-307.

⑤⑤ 殊に Ibid., pp. 90-91. ここで列挙される影しい書物の数は、クレーマーのそれに匹敵する。

⑤⑥ 自伝著者達の中でも例外的に、バンフォードはグラマー・スクールに入学する幸運に恵まれた。そして、そこでの授業風景が詳細に記されている。Ibid., pp. 79-85. しかし、父親の反対でラテン語クラスに進むことを許されず、そのことが自己の人生の重大な転機であったと述べている。(pp. 91-93.)

⑤⑦ Ibid., pp. 132-169. また、この合間にこの地域に伝わる迷信の類にいくつかの詳述がある。

⑤⑧ Ibid., pp. 113-114.

⑤⑨ Ibid., pp. 131-132.

また示される。それはバーンの場合のように、自己のリスベクタビリティをミドル・クラスの価値と同化し得ないものとして示す際の抛り所とさえなっているように思われる。ここでは、これまでの分析から浮かび上がったこの二面性を、ほぼ同時期に執筆された他の八編の自伝を踏まえてより包括的に検討する。

ここで検討する何れの自伝においても程度の差こそあれ、書物による知識追求の過程が自己形成上重要な契機として力説される。自己の知的向上の契機として、著者達は制度的に与えられた教育の重要性を軽視しているわけではない。伝統的慈善学校、日曜学校、更には国教会および非国教会系の二団体によって敷設された初等学校での経験が自伝中詳細に論じられる。また、これら以上に労働者コミュニティと緊密に結び付いたデイム・スクール等私塾の重要性が説かれる。^①

しかし自伝において強調されるのは寧ろ制度的に与えられる知識の限界である。^② これらの教育機関での教育内容の貧弱さもさる事ながら、労働者の家族経済、及びコミュニティの圧迫等^③がその要因として示される。これらの叙述を背景として自己の知的向上における「自助」的側面が強調されるのである。このことは、自己省察の深さという点でも、テーマの一貫性という点でも際立つ自伝を著したバーンが制度的教育を経験していないという事実^④に象徴される。

書物の世界との出会いは、著者達にとってまさに「別世界」との邂逅に等しい。これは単に知的レヴェルの問題としてより、生活全体を変える出来事として記される。^⑤ そして、書物への執拗な渴望は労働者としておかれた環境の困難さと共にしばしば極端な表現をもなつて叙述される。例えばバンフォードは少年時代「掻き集められる限りの硬貨を書物に投じた」と表現する。^⑥ ウィリアム・ドットは二十歳時の賃金週九シリング中、生活費を僅か七シリングに削り（これは「他人を驚かせる程であった」とドットは記している）、残りは書物購入に充てた。^⑦ ロバート・ロウリは「妻の理解のもと」書物の為に食費まで削ったとしている。^⑧ ウィリアム・ラヴェットの書棚も「パンとチーズのみの夕食で胃袋をごまかす」ことによつて満たされた云々。^⑨ これらの幾分誇張を含んだ記述に著者達の自己イメージの一端が現れる。

しかし当時の労働者達の書物購入能力の限界もまた示される。そこで書物入手するためのあらゆる経路が開拓される。徒弟修業時の親方、^⑪日曜学校の教師、^⑫更には学校付設の図書館や巡回図書館等々。しかしここで強調されるのは同様の指向を示す仲間の労働者の役割である。例えば、アレクサンダー・サマヴィルを書物の世界へと導いたのは同僚の農業労働者であった。^⑬チャールズ・ショウを「文学という偉大なる世界」へと開眼させたのも同僚の陶工であった。^⑭こうした叙述には枚挙に遑がない。しかし労働者仲間の重要性は書物の入手源としてのそれに留まらない。それは知的向上の導きとして、あるいはその過程における精神的支えとして必要不可欠なものとされる。時に内輪の読書サークルへと発展する労働者間の相互扶助の在り方、これが何れの自伝においても大きな比重を占める。それは叙述の目的が自己の到達したリスペクタビリティの誇示よりも、むしろこの労働者間の集団的「自助」の在り方を示すことにあつたとの印象を受ける程である。これが著者達が自己のリスペクタビリティを示す際の特徴である。それが基本的には個人としての特性であれ、ここで強調されるのは到達過程における集団性なのである。

こうした叙述の反面が、ミドル・クラスの示す理想主義の拒絶である。ウィンセントが指摘するように、「有用知識普及協会」^⑮ Society for the Diffusion of Useful Knowledge に象徴される、知識の追求という領域での階級間の機会の平等と友愛という理念、^⑯これ程自伝著者達にとって空虚に映つたものはなからう。平等であるべき知識の世界、これがしばしば、彼らに現実の階級的不平等を浮彫りにして示したのである。^⑰制度的な教育機会から排除され、労働に圧迫される労働者として直面する現実の諸困難、これをたとえ消極的であれ克服する手立てとして示されたのが集団的「自助」の在り方だったのである。

書物による知識の獲得の到達点としてのリスペクタビリティ、これがバーンやクーパーにおいて、しばしば「合理性」という言葉と同義であつたのは先に見た通りである。これは他の著者達にも共通する。例えば、クリストファー・トムソンが、創造主が労働者に授けた「理性の力」への信念を自伝中に表明し、その自伝をこの目標に向けての「自己陶冶 Self-

elevation という崇高な大義に携わる同胞の労働者に献ずる」と記しているのもその一例となろう。②より明確に、ウィリアム・ラヴェットは労働者に「有用な知識」が普及することによって、「彼ら（労働者）の不道徳な慣習はより合理的な気晴らし rational pursuit へと道を譲り、（中略）その心は悪徳の誘惑に負けぬよう強化せしめられるであろう。」③としている。

自伝著者達にとつての「合理性」、その内容は合理性一般というより、極めて限定され具体的な事態を指す。そして、この「合理性」によって克服されるべき事態から説明される。まず第一に、この「合理性」は極めて道徳的色彩が濃い。知的改良はしばしば道徳的改善と結び付けられる。クリストファ・トムソンが「思考の自由な行使が道徳的改善をもたらす」とし、「隷属的で卑屈なペン屑拾い」、「人を墮落させるが如き官能性」等々を対置する時、このことは明らかである。自伝著者達が示す不道徳性とは過度の飲酒に象徴される刹那的で自墮落な生活である。飲酒慣行自体への嫌悪と、それに溺れ放埒な生活を送る仲間への蔑視と憐憫という些か複雑な視線、これが各自伝中に散見される。中でも代表的なのがバーンとロウリの自伝である。バーンの場合、この慣行は継父の否定的イメージに代表される。④ロウリの自伝で人生の到達点として示されるのが禁酒運動のレクチャーとしてのそれであり、同時にこの慣行の恐ろしさを示す逸話が長々と記される。⑤こうした記述は時に「低劣」な慣行に耽る仲間の排除という姿勢を伴う。それは次のトムソンの叙述に示される。

「私は当初からここでの仕事に嫌悪を覚えた。若く無思慮ではあったが、このような向こう見ずな輩とのつき合いに私は何の心の慰めも覚えなかった。私の関心は書物や絵画等に向けられた。私が追い求めているもので日々の仲間とのつき合いで何らかの反応が得られるものは殆どなかった。彼らの好みはもともと低劣な類のもので、その会話は嫌悪を催させるものであった。彼らの持っている書物とは言えば、不幸な事にあらゆる町で見い出される伝染病の溜り場から掻き出されてきた狼狽ながらくたの類である。彼らの娯楽とは言えば、カード遊びや硬貨投げその他の低俗な類のギャンブル、更に飲酒や噛みタバコであった。」⑥

払拭さるべき事態の二点目は、迷信・因習による生活の呪縛である。例えば、バーンは超自然的現象・存在に対して母親の示す信仰（これは imagination という言葉で示される）に理性 reason を対置する。ロウリはコンウォール地方の住民達の迷信への傾倒に対して苛立ちを隠し得ない。この二人に限らずこのことは他の多くの著者達の意識するところである。ここでは迷信・因習の類をコミュニティに偏在した所謂「魔法使い」Wise Man に代表させ、その未だに強い影響力からの脱却を力説したトムソンの言を引いておこう。

「我々がこのように自らを欺き、我々の無知を嘲笑うペテン師達の財布に硬貨を投げ入れることがいかに惨めなことか。もし職人連自身が『ワイズ・マン』となれば彼らは自分で物事の判断をせざるを得なくなる。そうすれば読書と教室で教えられる知識とでその判断力を成熟させるであろう。その時に彼らの精神は解放され、ペテン師どもの奇術は見破られ、『魔法使い』という商売に死の一撃が加えられるであろう。」

以上の考察から明らかのように、自伝著者達にとつての「合理性」＝リスベクタビリティの要は迷信やアルコール等に自己を見失うことなく自律的で着実な生活へと錨を下ろすことにあった。こうした生活様式の追求は、しばしば依然として迷信深く、利己的生活に恋々とする他の労働者との間に距離を、そして時に緊張感をもたらす。それは先程のトムソンの記述のように自伝著者からの嫌悪として示される場合、あるいはトマス・クーパーが記すように労働者コミュニティの側からの偏見という形をとった。

しかし自伝著者達のアイデンティティの在り方がこのような一面的なものでなかったことも既に明らかになった。バーンらの自伝に記された伝統的文化へのアイデンティティ、これもまたこの時期の自伝に共通する特徴なのである。伝統的コミュニティが内に含む迷信及び古来からの慣習・行事、これらは本来口承伝承を通じて代々家族・近隣という局地的空間に伝えられてきたものである。実際、自伝著者達が地域に広まる慣習・迷信を叙述し、またバンフォードの自伝に顕著に示されるように自己の父祖の系譜を辿る際、その由来を近隣住民及び家族による口伝えに求めている。この事から彼ら

の幼・少年期にはこのコミュニケーション手段が依然として機能していたことが窺える。こうした幾分非合理的な伝承に満ちたコミュニティでの生活は、ここで幼・少年期を過ごした人々に少なからぬ影響を及ぼした。例えばウィリアム・ラヴェットも幼少期におけるこうした伝承の洗礼について次のように記している。

「これら夜間の訪問者についての物語を、幼少時私は数多く聞かされた。それはまた少年時代になってからも幾度となく繰り返された。またそれらの存在を様々な形で目撃したと言う隣人達によって次々にその話は確認された。そうしたものが存在するという信念を頭の中に植え付けられ、幽霊の存在に私が疑問を抱くようになったのはロンドンに来て何年も経ってからであった。」^④

彼らもまたこれらの伝承を後代に伝えることを期待され、それが自伝という形に記されたのであろう。

こうした迷信の類のみならず、それらと混在するコミュニティの慣習・行事もまた自伝に記される。それはバンフォードの自伝にもっとも端的に示されたが、これは他の著者にも共通する。例えばチャールズ・スマスは印刷工達の職業・結婚慣習を、チャールズ・ショウは教会献堂記念祭や、闘犬・闘鶏等のブラッド・スポーツの模様を、また、ベンジャミン・ブリーリも教会献堂記念祭やガイ・フォークス・デイの慣行の様子を事細かに叙述している。また、自伝上でのコミュニティ再生という作業は、具体的慣行のみならず地域の漠然とした風土、人々の気質等の描写という形でも行われる。^⑤その際、地域の方言が叙述中に織り込まれ、地域文化の再生に一役買う。

こうした叙述の背景にあるのは、これらの文化が幼少時の自己形成に及ぼした影響を示すという意図のみではない。都市化・工業化の波によって解体の危機に瀕したコミュニティとその文化の理念的維持、これが叙述の背景をなす。そして、この文化の解体をその内部にて経験した者としての自負が叙述の端々に垣間見られるのである。^⑥著者達に共通してみられるこのアイデンティティの在り方、これをもたらししたのは伝統的コミュニティの解体に直面した彼らの存在の過渡性であった。この過渡性がまた、彼らの示すもう一つのアイデンティティとしての「リスペクタブルな労働者」の意味を明確にする。

すなわち、リスベクタビリティとは労働者にとって、単にミドル・クラスが提示するイデオロギー以上の意味があった。自伝に示されるように、彼らにとってのリスベクタビリティは解体しつつあるコミュニティの相互扶助や慣習的権利にもはや依存しえない都市的環境、そこにおいて必要とされる生活の自律性・着実性であった。それは抗い難く進行する都市化への現実的処方箋という側面を持つのである。

コミュニティ再生の試み、これは時に理念上のものに留まらない。自伝著者のある者は実際に衰退しつつあるコミュニティ慣行の修復に乗り出し、またその様子を自伝に記す。例えばクリストファ・トムソン、彼が奉じるリスベクタビリティは迷信的なコミュニティや「向こう見ずな」生活に埋没する仲間への嫌悪感を伴った。しかし、彼もまたコミュニティ修復の作業に乗りだすのである。シャーウッドの森周辺のエドウィンストウという村で、エンクロージャー等によって廃れつつある当地の伝統的慣習の復活を試み、その様子を次のように記している。

「真のサクソン人の血が森の住民達の胸を躍らせていた日々はもう昔の事となってしまった。何と嘆げかわしい事であらうか。そうした時代は労働と租税のみの時代に取って代わられてしまった。今では野良仕事やパン一欠片すら無い空のポケットのせいでジョニー・ブルの息子達は実に憂鬱そうである。我々古来の『祭礼の週』はほんの僅かな例を除いて唯バブに繰り出すだけの機会へと墮落してしまった。一八四一年秋、我々数名の村民はかつて向こう見ずな森の住民達を特徴づけ、今や廃れつつある陽気な祝宴を復活させんとした。そうした向こう見ずな村人達こそが、昔日の村の祝宴を忘れ得ぬものとしたのだ。」^③

同様の試みはマンチェスター近郊の郷里フェイルズワース村の慣行の復活に尽くし、それを叙述したベンジャミン・ブリーリの例にも見られる。^④しかし、こうした試みは何れも短命に終わる。

変貌しつつあるコミュニティ再生の試みはあくまで理念上のものに留まらざるを得ない。「古き良きイングランド」への愛着は十九世紀中葉以降さえ、むしろこうした世界が消失しつつある時にこそ強まる。労働者の自伝も様々な分野にお

いて見られたこの潮流の一部をなすと見られなくもない。この思いは自伝著者達に共通するロバート・バーンズやミルトンの詩への愛着に象徴される。これらに彼らが理念化する牧歌的世界が謳われ、またそれが彼らを詩作へと駆り立てる。

「幽霊、妖精や魔女達が人々の信念の中に息づくのを止める時、人々の詩情の多くが失われるに相違ない。迷信の時代は理念上の時代であり、その世界においては想像力が理性に優先する。人々の心は間断なき過渡の状態にある。迷信の要素から離れば離れるほど人々の心は功利的で疑り深いものとなっていくのだ。」^④

① 以下は、J. Burnett, D. Vincent and D. Mayall, op. cit. から作成。

表② 自伝著者の記す教育体験
(1790—1819に出生の者)

学校の分類	著者生年 1790—99	著者生年 1800—09	著者生年 1810—19
国教系	7	2	8
非国教系	1	0	1
日曜学校	3	7	12
私塾	9	32	33
パブリック・スクール	0	2	0
グラマー・スクール	0	0	0
大慈善学校	1	0	0
制度的教育を受けなかつたと明記	0	0	0
	2	3	2

自伝著者達に見られるこの傾向は、一般的趨勢とも符合する。三十年

代までは生徒数、学校数とも私塾が両教会系の学校を上回っていた。

しかし、四十年代の政治的不安定を背景に両教会系の学校数が急増し、五十年代になってようやく、収容生徒数では全体の三分の二を占めるようになった。F. Smith, *A History of English Elementary Education 1760-1902*, 1931, pp. 220-222. この理由として R. ジョーンソン

は教会系の学校が労働者コミュニティにとっては外的移植物と受けとめられたのに対して、私塾こそがコミュニティと緊密に結び付いた制度であったと述べ、R. Johnson, "Educational Policy and Social Control in Early Victorian England", *Past and Present*, 49, 1970. このことは、ラウエット、クーパー、ドットの名が、実際に私塾経営に着手していることや、クーパー、サマヴィルが私塾経営への労働者コミュニティの影響の強さについて自伝で述べていることから例証される。Cooper, op. cit., pp. 72-99, Somerville, op. cit., p. 28.

② 例えば次のトムソンの記述を参照。「所謂、慈善学校の類を除いた、学校と名の付く所に通う上での越え難き障壁、それは我々の貧困である。そして、これらの学校が我々に与える知識たるや、ほんの申し訳程度のものにすぎない。せいぜい『教理問答』を学ぶか、名前を書くことや、稀に計算のごく初歩的事項を習うくらいだ。その程度の知識で、幼いうちから工場や堆肥置場で働き始めるのだ。僅か数ペンス、

- 家族がまへを手にされる助けと力を為す。」C. Thomson, op. cit., p. 97.
- ⑧ 「これら二つは、Lowery, op. cit., p. 45, Somerville, op. cit., p. 27, 等。
- ⑨ 徒弟修業の開始年齢になっても職に就かなかったワーバーは、モヒニテ、の圧迫を感じ、「何の役にも立たぬ怠け者」と日々後ろ指を指せられる苦しみ」をこう記している。Cooper, op. cit., pp. 40-41.
- ⑩ 例えば、ブリーリは次のように記す。「それはあらゆる意味で私にとって新たな光明であった。私は自分が存在しているだと考えた。世界とは別の世界で生活することになった。」Brierley, op. cit., p. 44. 同様の表現は Bamford, op. cit., p. 91, Lovett, op. cit., pp. 34-35.
- ⑪ 次のマウハットの言を参照。「私がまだ若かった時代を回想し、その当時と現在、そして今の若い人々の享受している恩恵、すなわち安価な書物、新聞等の教育手段の豊富さと比較してみると、自分が極めて不運な時点で置かれたことを悔悟せざるを得ない。なぜなら、知識を渴望しながら、私には啓発してくれる書物も、導いてくれる教師も無かったからである。」Lovett, op. cit., p. 21. 更に Thomson, op. cit., p. 319, 参照。
- ⑫ Bamford, op. cit., p. 90.
- ⑬ Dodd, op. cit., p. 291.
- ⑭ Lowery, op. cit., p. 63.
- ⑮ Lovett, op. cit., p. 36.
- ⑯ Cooper, op. cit., p. 42.
- ⑰ Shaw, op. cit., pp. 138-140.
- ⑱ Cooper, op. cit., p. 34.
- ⑲ Somerville, op. cit., pp. 55-57.
- ⑳ Shaw, op. cit., p. 92.
- ㉑ 「この本を讀むことは Cooper, op. cit., pp. 51-66, Brierley, op. cit., p. 33, Dodd, op. cit., p. 289.
- ㉒ その重要性は次の自伝に示される。
Lovett, op. cit., p. 35, Lowery, op. cit., p. 72, Smith, op. cit., pp. 46-47, Cooper, op. cit., p. 47.
- ㉓ SDUK については Web, op. cit., Alrick, op. cit., H. Smith, The Society for the Diffusion of Useful Knowledge, 1826-1846, 1974, 参照。またこの団体と自伝著者達が共有した「有用な知識」については、Vincent の意味とを説明している。Vincent, op. cit., pp. 133-165, 参照。
- ㉔ 「他のものを追い求める際は、最も根気強い努力にも拘らず目的を達したものを入手するのに失敗することは度々ある。その場合の目的とは、通常世俗的な成功であり、それは競争相手の手中にあり、それを得るに最もふさわしい人の手にはいる前に持ち去られてしまう。しかし知識の追求にあっては、いかに多くの競争相手がいてもそのことは少しも問題にはならないのだ。誰も他人の邪魔をしない。また、他人のチャンス奪うことも出来ない。逆に、彼らは皆仲間なのであり、物質的に助け合うことも出来る。獲得せんとする富はあらゆる人々の望みに応ずるべく自己増殖する性質を有するのだ。」これは、後の S・M・マイルズにまで影響を及ぼした G・L・クレイクの書物の主要テーマであり、SDUK の理想がこの書に結実しているように見えてよい。
G. L. Craik, Pursuit of Knowledge Under Difficulties, vol. 1, p. 418, 以下 Vincent, op. cit., pp. 144-145, 以下引用。
- ㉕ 例えば Shaw, op. cit., p. 21, 参照。
- ㉖ SDUK 流の理想主義の排除という点では、自伝著者とチャーティストに一致する。現実の階級差別の是正が、チャーティスト達にと

つて、労働者の知的解放の前提だったのである。「ミルトンの漁夫達は失業したのでもブルーム卿は有用知識階級のゆゑにしたが、この「直ぐ」資本家になる決心をした。」*Poor Man's Guardian*, 18 May, 1833. 等々の挿話が盛んにチャーチキスト機関誌上で行われた。引用を合せて「ミルトン」R. Johnson, "Really Useful Knowledge"; *Radical Education and Working-class Culture, 1790-1848*", in J. Clarke, C. Critcher and R. Johnson, eds, *Working Class Culture, 1979*, pp. 75-102. ところが「階級差別の是正」の主張は、必ずしも直ぐは見えてきたのだ。

- ②③ Thomson, op. cit., pp. vi-vii, 319.
- ②④ Lovett, op. cit., p. 58.
- ②⑤ Thomson, op. cit., p. 8.
- ②⑥ Burn, op. cit., *passim*, esp. pp. 43-44, 47, 60-61.
- ②⑦ Lowery, op. cit., pp. 187-194.
- ②⑧ Thomson, op. cit., p. 173, したがって彼は「ミルトンの直ぐにも見えて」や「ミルトンは」「かじり書きのタタノミな職種」であった「製輪業」で「ミルトン」を脱して「Burn, op. cit., pp. 156-157.
- ②⑨ Ibid., p. 68.
- ②⑩ Lowery, op. cit., p. 130.
- ②⑪ Thomson, op. cit., p. 115. 他は「魔法使」の悪影響をめぐって記述して「Cooper, op. cit., p. 35. 等」.
- ②⑫ これらについては先に触れた「クーパーのメンデムスタとの葛藤」や「ミルトン」が「合理的知識」獲得の過程で直面した「リンカンシャー方言を喋る隣人達との緊張等々」. Ibid., p. 58. また「著書達の地域方言抜粋の試みは他は」. Lovett, op. cit., p. 34. 参照。これは次に述べる「口承伝承の問題」に関係する。
- ②⑬ 口承伝承 Oral Tradition の意味は「Folk Life」生活における

機能としての論文を引いた。D. Vincent, "The Decline of the Oral Tradition in Popular Culture", in R. D. Storch ed. *Popular Culture and Custom in Nineteenth-century England*, 1982, pp. 20-47.

- ②⑭ Bamford op. cit., p. 22. や②⑮ Burn, op. cit., p. 66, Somerville, op. cit., pp. 24, 42, 等。
- ②⑯ Lovett, op. cit., p. 9.
- ②⑰ 「ミルトン」Somerville, op. cit., pp. 67, 70, 115, Lowery, op. cit., pp. 82, 109, 113, 116, 149, 153. 等。
- ②⑱ 「ミルトン」が最も集中的に現れたのは「Bamford, op. cit., pp. 116-124. 他は」. Burn, op. cit., p. 124, Somerville, op. cit., p. 115, Lowery, op. cit., p. 132. 等。
- ②⑲ 「ミルトンの直ぐ」が端的に表明されたのは既に（前節註⑤）見た通りである。他の例として「Thomson, op. cit., p. 269. 等」参照。
- ②⑳ Thomson, op. cit., p. 345.
- ②㉑ Bierley, op. cit., pp. 46-47. 「ミルトンの慣行とは」、教会敬堂記念祭「のミルトン」である。したがって「この試みは二年の短命に終わる」.
- ②㉒ したがって傾向を示す文献史料の「ミルトン」は「M. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980*, 1981. M. ハートナー「原剛訳『英国産業精神の衰退』（勁草書房一九八四年）及び」. D. Roverts, *Paternalism in Early Victorian England*, 1979.
- ②㉓ 自伝に採られた「ミルトン」は「Bamford, op. cit., p. 287, Burn, op. cit., pp. 44, 160, Somerville, op. cit., p. 56, Cooper, op. cit., p. 42. 等」.
- ②㉔ Burn, op. cit., p. 68.

おわりに

以上に検討してきた自伝は、主に十九世紀の中葉に執筆、出版され、ヴィクトリアニズムの根幹をなすリスベクタビリティ^①崇拜の労働者版を具現したとして広く受け入れられたものである。確かに、著者達のリスベクタビリティ^①「合理的」生活様式の奨揚と、自墮落で利那的生活を払拭し切れないでいる仲間の労働者に対する苛立ちや嫌悪感はこうした評価を正当化する様に見える。

しかし、この時期の自伝にはもう一つのアイデンティティもまた表明されるのである。この二重の自己像^①の提示、それはミドル・クラス流の区別に従えば矛盾に満ちたものである。しかし、自伝著者にとって、「合理的」側面は抗い難く進化するコミュニティの解体と都市化という、彼らが直面した変化への現実的対応の必要性の表明であり、他方はこの変化によって失われつつある文化へのアイデンティティの理念的表明に他ならない。

「リスベクタブルな労働者」に内在する伝統文化へのアイデンティティ、これは本稿冒頭で触れたリードやベイリの主張と関わる。ベイリは「リスベクタブル」「ラフ」という区別は、外的観察者たるミドル・クラスによる理念的、或いは恣意的選別の結果であり、現実にはこれは同一の労働者に内在する二側面であるとして、この二分法を排除した。また、こうした同時代人の先入観が後の「労働貴族」概念形成にまで影響を及ぼしたとする。同時代観察者による道德的カテゴリ^②と社会的カテゴリの混同は「労働貴族」研究においてもつとに認識されてきている。ここではこの概念そのものは非についての判断を差し控えるが、少なくともミドル・クラスによる二分法の恣意性、これは自伝に見られた自己認識の在り方からも明らかである。それはこのような単純な二分法の問題性を浮彫りにする。彼らが想定した「リスベクタブルな労働者」と、自伝に示される労働者像には大きなズレが存在する。リスベクタビリティという潮流下に伏流する伝統文化へのアイデンティティ、これがこの時期の自伝の際立った特徴なのである。

したがって、これらの自伝に示されたのは決してミドル・クラスによる労働者「矯正」の成果などではない。自伝においてリスペクタビリティが提示される際も、ミドル・クラスの援助によらぬ労働者間の集団的「自助」の在り方、ここに力点があった。とはいえ、一方で奉ずるこの価値規範故に自伝著者達はしばしば、この規範を敵視する他の労働者達とのジレンマにも直面する。また、例えばバーンの自伝に端的に見られるように、彼のリスペクタビリティは、あくまで所与の環境への現実的対応として示される。この意味で、リスペクタビリティの表明自体、現状肯定の上での内的改良という面が強い。そこにはチャーターイズム衰退後の時代の雰囲気が如実に反映してもいる。

しかし、この時期の自伝が自伝という表現形成にもっとも適合していたとも言える。自伝に限って言えば、八十年代以降になるとそこに表現される自己像に一つの変化が訪れる。ウィクトリアニズムの影響濃い中葉の自伝の一特徴であった自己陶冶的労働者像、これはこの時期になると影を潜め、代わって政治活動家としての経歴の叙述に終始するプロパガンダ的色彩の濃い、「自伝」が主流となる。そこにおいては自伝の中心を占めるべき自己形成の過程が労働運動の叙述に埋没する。自伝におけるウィクトリアニズムの消失は労働者の自伝のステロタイプ化という皮肉な結果をもたらすのである。

① ハケットによると、労働者の伝統的文化の自伝中における詳細な再生、これは中葉に限らず、十九世紀の自伝に一貫した特徴であり、むしろ、リスペクタブルな自己像の提示という側面のほうが、中葉の自伝に特有の現象とされる。しかし、ハケットは十九世紀の自伝のアウトラインを示しているだけで、具体的に裏証しているわけではない。

Gray, *Aristocracy of Labour*, pp. 40-42.

② Gray, *Aristocracy of Labour*, pp. 42-44.
③ ハケットは「セルフ・メイド・マン」的側面の希薄化と、「セルフ・メイド・クラス」の強調をこの時期の自伝の特徴とし、その背景として、新たな階級意識の形成を主張する。以上、Hackett, op. cit., pp. 27-38.

(京都大学大学院生)

The *Sen* 宣 of the Nara Period

by

Shinji Yoshikawa

This article is meant to discuss some characteristics of the *sen* (宣) which appeared in the historical sources of the Nara period.

The *sen* is divided into three categories; “the *sen* of imperial orders”, which were the manifestations of imperial intentions handed down through the hands of the *nyokan* (女官), (2) “the *sen* of decisions”, which were the proclamations of official settlements within administrative circles, and (3) “the *sen* of authority”, which were of a rather private character.

Among these three categories, the second one was closely related to literal administration, sometimes taking the actual form of official documents. This was rather exceptional, because the administrative circles of the Japanese *ritsuryo* (律令) government, which hadn't originally had a system of written procedures, usually gave oral settlements to the petitions from the side of the *sakan* (主典).

I also succeeded in reconstructing the communicative channels and the methods of the *sen* to some extent.

In conclusion, the following points were made clear. First, the *sen* of the first category was probably dispatched by oral communication. Second, however, documents which substituted for the oral *sen* existed. Finally, these documents can be interpreted as the formal origins of the *senji* (宣旨) in the Heian period.

The Working Class and Their Autobiographies in Victorian England

by

Ryo Sakuma

“The labour aristocracy” or “the respectable working-men” have attracted much attention as the key groups in understanding British work-

ing class history after the middle of the nineteenth-century. But, recently these groups have been reconsidered with special attention to the quality of their values. In the course of this reconsideration, it is claimed that these figures have been much influenced by the distinction between “the respectable” and “the rough” drawn by middle-class contemporaries as external observers of the working-class. If it is so, how did “the respectable working-men” see themselves? In this article, we tried to approach this question by analyzing the autobiographies written by working-men themselves and showing their identity in them. As a result, it is made clear that these autobiographies have two aspects: on the one hand, autobiographers show their belief in respectability, which the middle-class idealized, and on the other hand, they show their identity with “traditional culture”, which, to middle-class eyes, would contradict respectability. This, in return, will show how arbitrary that distinction was, and how superficial the figure of “the respectable working-men” is.

Меньшеви́стская партия и Росси́йская Коммунистическая партия

Соудзи Амакава

Хотя советские историки считают меньшевистскую партию «мелкобуржуазной партией», она являлась партией, наиболее уважающей интересы рабочего класса придавая им большое значение. Это определило также выбор меньшевистской партией, руководимой Мартовым, пути «легальной партии» в рамках нового режима после Октябрьской революции, потому что она видела позади большевистской партии (Российской Коммунистической партии) реально существующий рабочий класс в России. Она пыталась приобрести поддержку как можно больших рабочих для того, чтобы обращать, пользуясь их давлением, курс советской власти на «правильный путь».

Несмотря на то, что советские историки утверждают, что меньшевистская партия, изменив интересам масс, потеряла их поддержку и погибла сама собой, на деле она опять начала приобретать поддержку рабочих масс, недовольных жесткими политиками РКП, и именно поэтому она часто потерпела репрессию со стороны РКП. Весной 1921 года коммунистическая власть перед лицом краха «военного коммунизма» и массовых восстаний сочла ее весьма опасной, сильно репрессировала и привела ее к развалу. Итак коммунистическая власть сохранилась, но «советская демократия», которую РКП раньше внушала массам, значительно потеряла свою сущность.